

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

小林エリカ 作家 / 漫画家

Erika Kobayashi / Novelist / Manga artist



CREATOR^{NO} INTERVIEW 124

小林エリカ Erika Kobayashi

1978年東京生まれ。作家・漫画家。

著書は小説「トリニティ、トリニティ、トリニティ」(第7回鉄犬ヘテロトピア文学賞受賞)(集英社)、「マダム・キュリーと朝食を」(第27回三島由紀夫賞候補、第151回芥川龍之介賞候補)(集英社)、「放射能」の科学史を巡るコミック「光の子ども1,2,3」(リトルモア)、短編小説「彼女は鏡の中を覗きこむ」(集英社)、アンネ・フランクと実父の日記をモチーフにした「親愛なるキティーたちへ」(リトルモア)、作品集に「忘れられないの」(青土社)など。他には訳書「アンネのこと、すべて」アンネ・フランク・ハウス編、日本語訳監修石岡史子(ポプラ社)。

主な展覧会は個展に「最後の挨拶 His Last Bow」(2019年、Yamamoto Keiko Rochaix、ロンドン)、「野鳥の森 1F」(2019年、Yutaka Kikutake Gallery、東京)、グループ展に「話しているのは誰? 現代美術に潜む文学」(2019年、国立新美術館、東京)、「六本木クロッシング2016: 僕の身体、あなたの声」(2016年、森美術館、東京)、「The Radiants」(2015年、Bortolami Gallery、ニューヨーク)、など。

クリエイターインタビュー

『都市に潜む、歴史の痕跡を探索する』

“目に見えないもの”は、半径1mにある。

No

124

小林エリカ

作家 / 漫画家

ERIKA KOBAYASHI / Novelist / Manga artist

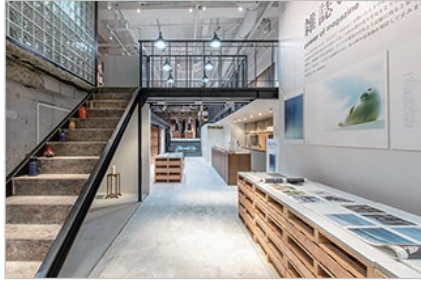
published_2021.2.10 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

作家であり、漫画家。そして、自身が描く世界を映像やドローイング、テキストといった広い領域を行き来しながら発信する小林エリカさん。アウトプットの形は変えながらも、その奥には常に“目に見えないもの”という大きなテーマが存在しています。目に見えないものは決して特別な世界ではなく、誰の日常にもある家族や感情、大切な選択、時間……といった半径1mの出来事。“目に見えないもの”——ひょっとしたら“見たくないもの”とどう向き合うのか。小林さんの作品やお話には、その視点のヒントが隠されています。

救いのある、安心できる場所。

六本木は大人の街という印象で、若い頃は来るたびに緊張していました。ここ「文喫」ができる前は、同じ場所に青山ブックセンター六本木店があって、そこだけは緊張せずにいられる場所だったんです。残念ながら2018年に閉店してしまいましたが、その後「文喫」という本にまつわる場所ができたことは私にとって大きな救いであり、今も安心して六本木に来られる理由のひとつになっています。

大人になってからは、森美術館や国立新美術館で展示をさせてもらったり、Yutaka Kikutake Galleryが数年前から私のギャラリーになったりというご縁もあって、頻繁に来る街になりました。六本木で新しい展覧会が開けば必ず足を運んでいますし、「文喫」をはじめステキな本屋さんや美術館がたくさんあるので、はしごをすることもあります。



文喫

「本と出会うための本屋」として、2018 年にオープン。文化を喫する入場料のある本屋であり、人文科学や自然科学からデザイン・アートまで約3万冊の書籍を販売している。一人で本と向き合うための閲覧室や、複数人で利用可能な研究室、小腹を満たすことができる喫茶室を併設。エントランスでは珍しい雑誌を販売する他、定期的に企画展を開催している。



Yutaka Kikutake Gallery

2015 年、オーナーの菊竹寛の手によって六本木に開廊。国内外のアーティストとともに、多様化する現代美術の展覧会や時代を見据えた活動を展開している。絵画や写真、彫刻、映像など同時代に制作される作品を紹介するとともに、アーティストトークの開催や展覧会カタログ、アーティストブックの出版など多角的にアートを支えている。写真は、小林さんの個展『野鳥の森 1 F』(2019 年)時のもの。

書けば、死なずに生きられる。

本との出会いは、私にとっても大きなもの。10 歳の時にアンネ・フランクの『アンネの日記』に出会ったことが、私の大きなテーマ " 見えないもの " を意識したきっかけでした。「わたしの望みは、死んでからもなお生きつづけること!」(※)という一節に、「書けば、死なずに生きられるんだ」と子どもながらに感動したのを覚えています。以来、大人になったら、作家かジャーナリストになることを夢見るようになりました。

大人になった今も、ふとアンネ・フランクはいないけれど、彼女が書いたものが読めるという事実に深く感動するんです。一方では " おばあさんになったアンネ・フランク " の文章を読めないという現実も、私に大きな影響を与えています。ひとつのきっかけとなったのが、30 歳くらいの頃に目にした自分の父親の日記でした。それは第二次世界大戦中、当時 16、17 歳だった父が書いた日記だったのですが、それを書いたのが今目の前にいる 80 歳の父親というのも不思議な気分でした。それに比べて父がアンネ・フランクと同じ年の生まれ(1929 年)だと知り、さらに衝撃を受けたんです。アンネが生きていたら、80 歳のおばあさんになっていたんだ、と。

以来、誰かが生きた痕跡、日記には書かれなかった一瞬一瞬みたいなものに思いを馳せるようになりました。もっと言えば、日記を書くことができなかった誰かの人生にも、同じように大切な瞬間があったはず。だとするなら、今ここに生きている私が、消えてしまった誰かの一瞬や生きた痕跡に気づき、どうすくいあげて紙の上書き留めるのか。そう考えはじめてからずっと、" 目に見えないもの " が私のテーマになっています。

※『アンネの日記 増補新訂版 (文春文庫)』著：アンネ・フランク、訳：深町眞理子 より



小林エリカ 作家 / 漫画家

ERIKA KOBAYASHI / Novelist / Manga artist

published_2021.2.10 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

西暦 3503 年まで残り続ける、見えない痕跡。

私のつくるものには、" 放射能 " がよく登場します。みなさんと同じように東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故で、より身近なものになったのは確かですが、実はそのずっと前から " 放射能 " と呼ばれるものの歴史について興味を持ち、調べていたんです。そんな中、放射性ラジウムの発見者であり、ノーベル化学賞を2度受賞したマリ・キュリーの実験ノートを知りました。探してみると、実は日本の明星大学の図書館にあることがわかったんです。見た目は布貼りのかわいらしいノートですが、表紙にガイガーカウンターをかざすと、かすかに反応する。聞くとマリ・キュリーが素手で放射線量の高い物質を触っていたため、指紋がついた部分は今も線量が上がるのだそうです。

マリ・キュリーがはじめてラジウムを手にしたのが、今から 120 年近く前の 1902 年。放射性物質の半減期が 1601 年と言われているので、西暦 3503 年になってもノートについての彼女の指紋は残り続けることになります。その時、皮肉なことでもあるけれど、ふとアンネ・フランクの「わたしの望みは、死んでからもなお生きつづけること」という言葉に繋がった気がして。マリ・キュリーという名前を未来の人は覚えていないかもしれないけれど、彼女の生きた痕跡は残る。そう考えたら、" 放射能 " や原子力という問題を良いか悪いか、賛成か反対かではなく、それらを超えたところで捉えて書くことが必要かもしれないと思ったんです。それが私の著書『光の子ども』であり、これまで書き続けてきたシリーズやインスタレーションです。



『光の子ども』

今回のインタビューの中でも登場した、科学者マリ・キュリー。彼女が発見し、「わが子」と呼んだ放射性物質の歴史を、過去にタイムスリップをした光少年と、ネコのエルヴァンの目を通じて紐解いていく。"放射能"はいつ、どこから、どうやって、ここに来たのか。小林さんがコミックとして描いた、史実とフィクションを交えた物語。

分からない、という前提からはじめる。

また、父の日記は、もうひとつ私に考えるきっかけを与えてくれました。自分にとって父親は常に父親で、大人だけれど、日記の中にいるのは今の私よりもずっと若く、青春に悩む16、17歳の少年。何十年と一緒にいたはずなのに、その向こうには語りえないこと、知りえないことが広がっているんだと、気づかされたんです。分かりえないって、すごく絶望的に思えるじゃないですか。でも、私は分かったつもりになっていたことの方が悲しくて。

分かったつもり、は日常にも転がっているもの。私自身はじめて東京電力福島第一原子力発電所の構内に入らせてもらった時に、あらためて気づかされたことがあります。「"放射能"は見えないものだ」と書き続けてきたにも関わらず、自分が思い浮かべていたのは転がった瓦礫や生い茂った森といった目に見えるイメージだったんです。でも、実際の構内には草木などなくて、一面銀色のモルタルに覆われたSF映画のような光景でした。しかも、建物の中にはローソンがあって、うちの近所にある店舗と何ら変わらない。それを見た時、これまで自分は、"放射能"というもので、汚染された場所というものを、まるで自分とは関係のない別世界のように思い描いていたことに気づいたんです。

そしてそこから、分かったつもりではなく、分からないながらもどう想像するか。見えないものを見えるようにするのではなく、見えないものを見えないまま、どう伝えていけるのか。はじめてそんなことを考えて制作したのが、最新作の『トリニティ、トリニティ、トリニティ』や、国立新美術館の展示（『話しているのは誰？現代美術に潜む文学』）でした。見えない、分からないという前提ではじめれば、その先に希望があるのではないかと思ったんです。



『トリニティ、トリニティ、トリニティ』

小林さんの最新作。舞台は2020年夏、オリンピックに沸く東京。主人公とその母、娘、妹。その日常は、高齢となった母の入院で少しずつ変化していく。同じ頃、街にはトリニティと呼ばれる不気味な症状に取り憑かれた老人たちが現れ、予想外の行動を起こし始める……。"目にみえざるもの"の怒りを背負った者たちが立ちあがる、ノンストップ近未来長編。



小林エリカ 作家 / 漫画家

ERIKA KOBAYASHI / Novelist / Manga artist

published_2021.2.10 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

100年後の未来を握る、"選択"の切実さ。

今は世界中が、目に見えないコロナウイルスと向き合っている最中。きっと、否が応でも見えないものに目が向くと思うんです。できることなら、怖いものは見たくないし、考えたくない。だから、分かったつもりで安心したいという気持ちも理解できるんです。それでも、やっぱり見えるものがすべてじゃないということの当たり前に、細々と気づける自分でありたいな、と。もうひとつ感じるのは、立場の弱い人に何もかもを押しつけてやり過ぎそうとする、人間の目に見えないものへの対峙の仕方。それは、放射性物質が降った事故の時から、さほど変わっていないのだと実感します。

ただ、私はこの世界に絶望はしていないんです。たとえば、エックス線や放射線が発見されたのが100年ちょっと前。当時の歴史を調べていると、たった100年前なのに女性には選挙権すらありませんでした。でも、100年でこんなに変わったのだと考えると、ここから先の100年で社会も人ももっと変われるはずだと希望が湧く。作品を書きながら、そんなことをしみじみ思ったりしています。

100 年後を変えるためには、選択が大事だと思います。以前、『アンネの日記』と父の日記を手にも、アンネの足取りを死から生へ向かって辿り、自分自身も日記を書き記す『親愛なるキティーたちへ』という作品をつくりました。その時にアンネが生涯を終えたベルゲン・ベルゼン強制収容所を訪れ、「ここがあと1週間早く解放されていたら」アムステルダム《隠れ家》を訪れ、「あと数日の間、アンネがいたアムステルダムの隠れ家を密告する人がいなかったら」と、ひとつひとつの場所を訪れるごとに、彼女が死なずに済むための理由を想像したんです。そうして、アンネが生まれたフランク・フルト・アム・マインへ辿り着いた時、「もしもあの時、誰もナチ・ドイツに投票しなかったなら」と思ったんです。

その時、切実に感じたのは一人ひとりが誰かの命を握っているということ。そして、自分が取る選択によって 10 年後の誰かを生かしても殺しもするんだということでした。結論は賛成であろうと反対であろうと、どちらでもいいと思うんです。大事なのは自分が選んだことが10年、20 年先、100 年先までも大きく影響すると知ること。目先のことにとらわれず、未来を考えて選択できる人でありたいというのは、私自身が強く思っていることでもあります。

都市の歴史の痕跡と、" たまたま " 出会うこと。

私の作品には戦争が登場することもよくあり、「歴史的なことが好きなんですか？」とよくご質問いただきます。あくまで私が大切にしているのは、自分の半径1 m くらいにあること。たとえば、自分の母や母の母、といった身近な存在を辿っていくと、どうしても戦争にぶつかってしまいます。そこを描かないと伝えられないことがあるから、戦争のことを書いているというだけで。書きたいという欲求の根本は、なぜ私はこの時代に、この場所で、こういう状況下で生きているのかを知りたいという気持ちなんです。

半径 1 m というのは身近な人々だけじゃなく、街の中にもある。本を書く前に、さまざまな街を訪れることがあるのですが、都市の中には層の違うあらゆる歴史が残っていて、その断片みたいなものを見つけた時に、すぐエキサイティングな気持ちになります。『トリニティ、トリニティ、トリニティ』を書く時も、チェコのヤーヒモフ（現地の鉱山原産の鉱石からキュリー夫妻がラジウムを発見したことで知られる）という本当に小さな街へ取材に行きました。

その街の真ん中を走る " 銀の道 " を歩いていた時、たまたま壁を見上げると五輪エンブレムが目に入り、その傍らには "1936" と数字が入っていたんです。「なぜ、こんなところに？」と気になって調べていたら、私は知らなかったことがたくさんあって。"1936" とはナチス政権下で行われたベルリンオリンピックの開催年で、はじめての聖火リレーが行われた大会でもあったのですが、その次に開催される 1940 年のオリンピックは、実は東京で予定されていたんですね。私にとっては「東京オリンピック」というと 1964 年のイメージしかなかったけれど、その前に幻となった大会があったことをはじめて知りました。

たまたまエンブレムを見つけて知った歴史から生まれたのが『トリニティ、トリニティ、トリニティ』という物語なのですが、現在このタイミングで、次のオリンピック開催国であるパリでフランス語版が刊行されることになったのにも縁を感じます。足を運んだ先で、ふと過去の痕跡や断片に出会えるのは、私にとってとても刺激的なこと。ガイドブックに書かれるようなことではないけれど、何か惹かれるものに出会う可能性って、あらゆる街にあると思うんです。



小林エリカ 作家 / 漫画家

ERIKA KOBAYASHI / Novelist / Manga artist

published_2021.2.10 / photo_yoshikuni nakagawa / text_akiko miyaura

多種多様な人々が交差する六本木の歴史探索。

六本木にも、たくさんの " 痕跡 " がある気がします。たとえば、国立新美術館の一角には、旧陸軍の連隊の跡地が残っているんですよね。教科書で習った歴史って、私にはすごく遠い感じがするけど、実はひと繋がりに今の自分の生きている場所にあるもの。それこそ、自分の母の母、祖母にあたるくらい近い距離の人たちが生きていた頃の建物、その人たちが触れていたかもしれないものに、街を歩くと自然とぶつかってしまうことがある。そういうものに会った時、私はすごくハッとするんです。だから、もし六本木を舞台にプロジェクトを考えるなら、街の歴史探索をしてみたいですね。歩きながら、昔の六本木の話や、今そこに暮らす方々の話が聞けたら、すごくいいなって。

特に六本木は、国内のさまざまな地方やいろんな国外からの方、カルチャーが入り混じっている場所なので、街を歩いていて人とすれ違うと、その人たちがどんなバックグラウンドを持ち、どこから来てどんな風に暮らしているんだろうと、すごく気になってしまうんです。なぜ日本なのか、なぜ東京なのか、なぜ六本木なのか。オーディオガイドを聞きながら街を歩くのもいいですね。

まだまだ知りがいのある大都市・東京。

こんな話をしていたら、ふと高山明さんのプロジェクト「東京ヘテロトピア」を思い出しました。私も第1回の「リガ・ヘテロトピア」に参加させてもらったのですが、リガと日本にまつわる歴史がある建物のストーリーを書き、現地の方に朗読してもらったテキストをその場で聞いてもらうという作品と一緒につくらせていただいたんです。その時私が書いたのは、実際の歴史をもとにしたストーリーを、そこに住み続けている幽霊が語るという作品。何より、その物語の舞台となる同じ場所でストーリーを聞けるのが、いいなと思いました。



東京ヘテロトピア

2013年から始まり、2020年まで拡大を続けた高山明発信のプロジェクト。参加者はガイドブックとラジオを手に都内を旅する。地図に記された場所に行き、ラジオを指定の周波数に合わせてと5人の詩人・小説家が書き下ろした物語が流れてくるという仕組み。見慣れたはずの「トーキョー」を異国のように「旅」する中で、作品は無数の偶然を招き入れ、参加者は自分だけの出会いを重ねることができる。

写真：蓮沼昌宏



リガ・ヘテロトピア

2019年、ラトビアの首都リガで行われたプロジェクト。「東京ヘテロトピア」と同様、参加者はガイドブックとラジオを手にリガ市内の6カ所を訪問。地図に記された場所で、ラトビアと日本の6人の作家が書き下ろした物語が聞くことができた。軍人スパイの小野寺信と、その妻でムーミンの翻訳者である小野寺百合子のリガでの痕跡を辿るツアーに。その作家の一人として、小林エリカさんも参加。写真は、小野寺夫妻がかつて住んでいたアパートの階段にて小林さんの物語を聞いている様子。

写真：Juris Rozenbergs

ぜひ歴史の潜む六本木で、高山さんに「六本木ヘテロトピア」をやってほしいなと勝手に思っていました（笑）。以前、フェスティバル/トーキョー13で行われた「東京ヘテロトピア」に観客としても参加したことがあるのですが、ひとつひとつの場所を歩き、今自分がそこにいる状況、聞こえてくる環境音が混ざり合う中、ラジオからの音だけは過去の歴史や小さな声を伝えてくれる。それが、すごく面白かったんです。

あらためて、私は東京が好きなんだなと感じます。もともと、いろんなものが集まった大都市が好きで、自分が生まれ育った街だからというのものもあるけれど、まだまだ伸び代があると思うんです。まだまだ自分の知らない東京がたくさん存在していて、研究できる場所だなと思うとすごくワクワクします。東京というより日本全体に言えることなのかもしれませんが、政治のこととか、協調性を求められるとか、私にとっては少し息苦しい部分もあるけれど、もっと変われると思うし、もっと街も面白くなるはずだと思っています。

絵本づくりから見えた " 目に見えないもの "

そして、私が今もうひとつ興味を持って向き合っているのが絵本。今夏に " 死 " をテーマにした絵本シリーズの最初の1冊が発刊する予定なので、現在はその準備を進めているところです。震災やコロナ禍などがあって、より死が身近なものになってきている中で、どんなふうに子どもたちに伝えられるだろう、子どもたちと一緒に話すことはできるのだろうか、日々考えることが増えました。子ども時代、私は死ぬことが本当に怖くてしかたがなかった、というのも大きいかもしれません。

自分の子どもを通してというより、最近では自分自身の子ども時代を思い出すことが多くて。もちろん忘れてしまっていることも多々あるけれど、時間が経ってようやく安心して思い出せるというか、言葉にできる感覚があるんです。昔、チェルノブイリ原発事故取材していたジャーナリストのセルゲイ・ミールヌイさんという方が、20 年経ってはじめて現地の人が語り出したというお話をされていたんです。たしかに 10 年、20 年しないと、語れないことってあるだろうな、と感じます。それから 20 年経ってもまだ語れないということも、あるだろうとも。特に親しい人の死などの辛い経験は、自分自身でも、なかなか言葉にできないし。そう思うと、自分の心の中の時間にも興味が湧いてきます。

でも、書きたいことが変わったということではないんです。" 放射能 " や戦争については、この先も書き続けていきたいと思っていますし、" 目に見えないもの " は、ずっと私の興味の対象であり続けるんだろうなと思います。

(撮影協力：文喫)

取材を終えて

小林さんの作品は日常にある目に見えないものに宿った、温もりや大切な真実に気づかせてくれます。"放射能"や戦争といったワードは、一見攻撃的なエネルギーに捉えられがちですが、小林さん自身の思いや作品はむしろ対極にあるもの。あらためてお話を伺い、手を伸ばして触れないと気づけない日々のすき間にある思い、ふと埋もれた誰かが残した素敵な物語を辿ってみました。分からないものだと知り、分かろうと想像することを忘れずに。小林さんの柔らかな話し方と心地よい声に、癒やされたインタビュー時間でした。

(text_akiko miyaura)